

創作白話小説の方法

—關西大學總合圖書館藏『白話文集』を中心に—

宮本陽佳

はじめに

日本における白話小説の受容は、近世期中頃、唐話學習の流行を契機に本格化する。まずは唐話を學ぶ「教材」として一部の漢學者に注目されたが、享保十三（一七二八）年に長篇白話小説『水滸傳』の和刻本、續いて短篇集「三言二拍」の和刻本が刊行され受容層が廣がると、物語への關心も高まってい¹く。寛延二（一七四九）年には「三言二拍」の翻案小説を含む讀本『英草紙』が刊行され、これ以後白話小説に影響を受けた作品が次々に登場することとなる。筆者はこれまで和刻本刊行の背景を検討し、白話小説が「教材」から物語を讀んで樂しむ「讀み物」と認識されていく過程を追究してき²た。

この過程の中で重要な役割を果たしたのが、京都の書肆・風月堂の主人であつた澤田一齋（元祿十四／一七〇一—天明二／一七八二）である。一齋、名は重淵、字は文拱、號は一齋と奚疑齋を用い、風月堂主人の通稱である風月庄（莊）左衛門を名乗つた。享保二十（一七三五）年に唐話學の先驅者である岡白駒に出會い、また古義堂の唐話學者達とも交わつて、唐話や白話文の讀解を學ぶ。時期未詳ながら『水滸傳』講

義を行い、更に「三言二拍」の和刻本『小説精言』（寛保三／一七四三年刊）、『小説奇言』（寶曆三／一七五三年刊）、『小説粹言』（寶曆八／一七五八年刊）を自身の書肆から刊行した。先の二作は白駒による施訓だが、最後の『小説粹言』は一齋自ら施訓も手掛けている。

以上のような業績から、一齋は研究・刊行の両面から日本の白話小説受容に多大な貢獻をしたと言える。加えて注目されるのは、彼の創作白話小説である。

古義堂の門人であり、白話小説通であつた松室松峽（元祿五／一六九二—延享四／一七四七）の日記には、延享元（寛保四／一七四四）年四月二十四日、一齋の來訪を受けたことが次のように記されてい³る。

風月庄左衛門ハ詩文ヲ能ス、小説文ヲ作ル事華人ニ似タリ、故ニ等覺院被⁴同道清談移⁵刻、未下刻來、申下刻還、丹州千束村百姓鈍刀ノ話ヲ譯シタル一冊風月作持參也、借⁶覽之、

「作ル事華人ニ似タリ」とあることから、「小説文」とは白話小説を指すと推定される。この記述から、延享元年以前、すなわち『小説粹

言」刊行前に、一齋は自ら「千束村百姓鈍刀ノ話」を白話小説にして
いたことが窺われる。

また現存する創作白話小説『日本左衛門傳』（天花堂杳山人撰）、『演
義俠妓傳』（烏有道人撰、天花堂杳山人跋）の著者も一齋との指摘がある
（杳山人）については後述）。いずれも日本で實際に起きた事件を題材
に採ったもので、『日本左衛門傳』は盗賊・日本左衛門こと濱島庄兵
衛が悪事を行った後處刑されるまでを、『演義俠妓傳』も大阪の遊
女・かしくが兄を殺しその罪で處刑されるまでを描く。具體的な成立
時期は不明であるが、それぞれ日本左衛門とかしくの實際の處刑（延
享四／一七四七年、寛延二／一七四九年）の後に執筆されたと思われ、
「千束村百姓鈍刀ノ話」の成立よりも遅れることが推定される。

一齋が白話小説を理解し、廣めていく中で、創作という行爲はどの
ような意味を持っていたのであろうか。本稿では、千束村の話を含む、
一齋が特に早い時期に創作したと見られる白話小説の特徴を検討し、
なぜ彼が創作を行ったのか、どのような方法で行ったのか明らかにす
ることを試みる。また創作された作品がその後の白話小説受容に及ぼ
した影響についても考察してみたい。

一、『白話文集』（假題）

松峽が讀んだ白話小説「千束村百姓鈍刀ノ話」は、現在關西大學總
合圖書館に所藏されている寫本（長澤規矩也氏舊藏、請求記號…
L23/900/38）の中に見えるものと推定される。この寫本は中村幸彦氏
によつて「外題も内題もない寫本一冊」と紹介され、假に『白話文
集』と名付けられた²⁾。以下本稿でもこの寫本を『白話文集』と呼ぶ。

『白話文集』には千束村の話を含め、七篇の短い白話文が收録され

ている。それぞれの著者や成立年次、これを寫した人物については未
詳であるが、中村氏は「一齋ら岡白駒に近い同好の士の白話作文集」
と推測する。次の表に中村氏の解説から七篇についてまとめた。

題	成立表示	著者表示	文體	内容
甘娘冤死記事		癡道人撰	白話	源氏名を甘巻と稱する島原の遊女が冤死するに到るまでを小説風にしたもの。當時の噂によるものか。
茶式	明和戊子季夏	都下煙水道人 記于伏水邀月亭中	文言	日本茶道の次第を漢文で詳らかに説明したもの。句讀訓點もついで、用語には左訓も加えてある。
記淨藏事		都下杳山人撰	白話	有名な淨藏貴所の傳説。
記千束邑事			白話	丹州千束村の莊客が鈍刀で大蛇を切り殺した話を白話にしたもの。民話の譯か。
祈福漢吃騙話			白話	洛東岡崎村の白狐を祀った祠に祈願した男が騙された話。當時評判の噂話らしい。
記藤原秀郷事		澤田重淵稿	白話	『俵藤太物語』の白話文。
周道傳奇		快活癡道人撰	白話	寛保元年、姫路の城主が吉原の太夫を身請けたことに始まる不始末を、中國五代某朝の話として白話文にしたもの。

三篇目の「記淨藏事」には「都下 杳山人撰」と撰者の名が見える

が、續く「記千束邑事」「祈福漢吃騙話」「記藤原秀郷事」には撰者の表示はなく、「記藤原秀郷事」の末尾に「澤田重淵稿」と一齋の名が記されている。中村氏は「都下 呆山人」を西田維則（生年未詳―明和二／一七六五）、或いは一齋と推測された。維則は白話小説に通じ、『西遊記』の翻譯者に擬される人物である。一齋の友人であり、白駒とも交流があつたと推定されている。近江の朽木出身であることから「口木子」「口木山人」と名乗つたため、中村氏は「呆山人」との關連の可能性を指摘した。また「澤田重淵稿」の記載が「記淨藏事」から「記藤原秀郷事」までの四篇に關わる可能性にも言及され、「呆山人」は一齋でもありうると述べている。

現時點ではどちらとも斷じがたいが、維則が通常名乗る「近江」「淡海」「江湖」ではなく「都下」とあることから、一齋が友人の號を眞似て名乗つたものである可能性は充分に考えられる。

「呆山人」に疑問が残るものの、表中に網掛けをした四篇、特に「記千束邑事」「記藤原秀郷事」に一齋が携わつた可能性は高いと考えられる。以下この四篇について、一齋の關與の可能性が高い順に検討してみたい。

一、「記千束邑事」

「記千束邑事」（以下「千束邑」）は、千束村（現京都府福知山市三和町千束）の民話を白話譯したもので、一齋はこれを松峽の元に持參したと推定される。梗概は次の通り。

ある農家の下男が腕の良い刀鍛冶のもとに赴き、千日間薪を運んで來る代わりに刀を打ってもらう約束をした。約束を果たした下男だが、刀鍛冶は鈍刀を磨き「寶刀を打った」と偽つて渡す。ところが、下男

が強く信じたために刀は力を宿し、下男に襲いかかろうとした大蛇を追い拂う。それを見ていた獵師が刀を買い取つたが、下男の手を離れた刀は二度と力を現わさなかつたという。

この話を收録する刊本等は見えないが、芥川丹丘（寶永七／一七一〇―天明五／一七八五）の寫本『詩文稿』に漢文（文言）で書かれた「記千束郵事」が收録され、内容が概ね一致している。丹丘は古義堂に入りしており、一齋とも交流があつたことが推測される。當時古義堂周邊でよく知られた話であつたのだろう。執筆時期については記載がなく不明であるが、次にこれと比較し白話「千束邑」特有の要素について考えてみたい。

一齋の「千束邑」にまず特徴的なのは、話の最後に次のような詩が置かれている點である（以下日本語譯、書き下し文は筆者による）。

後人有詩云、

千束邑中五尺劍 深山帶去走龍蛇
初知至誠貫金石 一口鈍刀爲莫耶

（後の人の詩に申します、

千束邑中の五尺の劍 深山に帶去して龍蛇を走らす
初めて知る至誠金石を貫き 一口の鈍刀莫耶と爲るを）

これは白話小説の構成を意識し置かれたものと推定される。白話小説には、最初に本篇の趣旨を示す定場詩、入話（話のまくら）を置き、本篇の後に物語をまとめる收場詩を置くという構成がある。全ての小説がこれらを漏れなく備えているわけではないが、講釋由來の特徴的な構成と言える。右の詩はこの構成を意識し、收場詩として話の筋に

合わせて獨自に作られたものと見られる。

また、本文中に「彌道、他爲着何説十金鑄之、原來識的莊客怎辨得一金、所以這般説道、（あなたは、彼がどうして「十金でこれを鑄てやろう」と言つたのだと思いますか。實は下男が一金だつて用意出来ないのをわかつていたから、このように言つたのです）」のように讀者への呼びかけと取れる表現が見える。これも講釋を源流とする白話小説の特徴を模したものであらう。

文言「記千束郵事」と比較すると、「千束邑」の方が描寫が多いことが見て取れる。次に掲げるのは、山の中で晝寢をしている下男に大蛇が迫る場面である。

文言「記千束郵事」

嘗晝睡山間、有蝮蛇起樹上、其頭如斗、雙眼炯々、掉舌吐氣、直將噉奴、：

（嘗て山間に晝睡す。蝮蛇の樹上に起くる有り、其の頭斗の如く、雙眼炯々、舌を掉ひ氣を吐き、直ちに將に奴を噉はんとす。：）

「千束邑」

不覺睡倒在石上、忽然一陣風吹起來、突出吊桶大小蟒蛇來、攀据一大松樹、眼光射人、鱗甲競起、張開巨口、吐出紅舌、對着莊客臉兒上吹那毒氣、：

（下男は）つい石の上で眠つてしまいました。突然一陣の風が吹き、つるほどの大きさの蛇が現れ、松の木によじ登ります。眼光は人を射るように鋭く、鱗は逆立ち、巨大な口を開き、赤い舌を吐き出して、下男の顔に毒氣をふきかけます。：）

「千束邑」には、傍線部のように文言で記されない風や大蛇の描寫があるが、その部分は『水滸傳』に類似の表現が見える。

『水滸傳』第一回

只覺得那里又一陣風、吹得毒氣直冲將來、太尉定睛看時、山邊竹藤裏、簌簌地響、搶出一條吊桶大小雪花也似蛇來、太尉見了、又喫一驚、撇了手爐、叫一聲、我今番死也望後便倒在盤陀石邊、……那條大蛇、逕搶到盤陀石邊、朝着洪太尉盤做一堆、兩隻眼迸出金光、張開巨口、吐出舌頭、噴那毒氣在洪太尉臉上、：

風や大蛇の描寫は、『水滸傳』第一回、洪太尉が山中で大蛇に遭遇する場面のもと近似している。一齋はこの場面を参考に「千束邑」の大蛇の場面を書いた可能性が窺われる。

また、文言「記千束郵事」とやや異なる展開も、一齋が『水滸傳』を参考に加えたものと推定される。次に掲げるのは、刀がひとりでに鞘から抜けて大蛇を追い拂つた後、それを偶然見ていた獵師（文言では「吏人」）が、無理やりに刀を買い取っていく場面である。ここでは『水滸傳』第七回で林冲が刀をかう場面との類似が見える。

文言「記千束郵事」

問奴曰、女所帶刀、吾請買之、奴曰、小人究極千日精力、不敢賣之、吏人乃出十金、強買刀去、奴得金終爲良農、：

（奴に問ひて曰く、女帶する所の刀、吾請ふ之を買はん。奴曰く、小人千日の精力を究極す、敢へて之を賣らず。吏人乃ち十金を出し、強ひて刀を買て去る。奴金を得て終に良農と爲る。：）

『千束邑』

獵戸道、痴漢不省の事、爾今變賣了幾金、做了本錢、做个買賣、不賽爲莊戸の奴、枉了一生麼、莊客沈思半晌、方纔點頭道、説的是、若與了餘百金、這口寶刀情愿送與爾哩、獵戸既是了刀靈威、怎生待三思、便引了莊客還了家、取百金與他、莊客得了金、自去了、不題、却説獵戸把這刀當晚不落手、夜間掛在枕邊、次早詣鍛家、：

（獵師が言うには、「馬鹿め、わかっちゃいない。今いくらかの金を手に入れて、それを元手にして商賣をすれば、農家の奴隸として一生を無駄にするよりいいだろう」。下男はしばらく考え、ようやく頷いて言うには、「仰る通りです。もし私に百金を下されば、この刀はあなたに差し上げましょう」。獵師は刀の靈驗を知っていますので、どうして悩むことがありません。すぐに下男を連れて家に歸り、百金を彼に渡しました。下男は金を得て歸り、それまでと致します。さて獵師は刀を手放さず、夜は枕のそばに置きました。次の朝刀鍛冶を訪ね、：）

『水滸傳』第七回（林冲が男から刀をかう場面）

那漢道我急要些錢使、你若端的要時、饒你五百貫、實要一千五百貫、林冲道、只是一千貫我便買了、那漢歎口氣道、金子做生鐵賣了、罷罷、一文也不要少了我的、林冲道、跟我來家中取錢還你、回身却與智深道、師兄且在茶房裏少待、小弟便來、智深道、洒家且回去、明日再相見、林冲別了智深、自引了賣刀的那漢、到家去取錢與他、就問那漢道、……那漢得了銀兩、自去了、……林冲當晚不落手看了一晚、夜間掛在壁上、未等天明、又去看那刀、：

文言「記千束郵事」にない、獵師が下男を家に連れ歸る展開や、手

に入れた刀を夜も手離さない様子は、林冲の行動が參考にされたことが明らかである。

この他、千日薪を運ぶから刀を打って欲しいと頼まれた際、刀鍛冶が心の中で「天有不測風雲、人有旦夕疾病（天に不測の風雲有り、人に旦夕の疾病有り）」と白話小説に度々現れる常言に似た言葉を呟く場面も見られる^③。單に原據を白話譯するだけでなく、白話小説によくみられる要素や、實際に描かれた場面を採り入れながら創作していることが窺われる。

三、「記藤原秀郷事」

次に、末尾に「澤田重淵稿」と記載される「記藤原秀郷事」（以下「秀郷」）を検討したい。これは平安時代中期の武將・藤原秀郷（依藤太）の傳説を白話譯したものである。梗概は次の通り。

秀郷は近江の瀬田橋に大蛇が出るとの噂を聞いて赴いた。果たして大蛇が橋の上に横たわっていたが、秀郷は動じることなくその背をまたいで行く。すると大蛇は一人の男の姿となり、この下に住む龍王と名乗る。龍王は大蛇の姿に扮して、近頃配下を苦しめる大百足を倒してくれる勇敢な人間を探していたのだという。秀郷は龍王の頼みを受け、大百足を三本の矢で射倒す。龍王はお禮に絹・俵・鐘を送り、家に歸った秀郷は巨萬の富を得た。

この類話は『今昔物語集』や古繪卷等複数の文獻に見られるが、新井貴子氏による詳細な比較結果に照らすと、『太平記』卷十五「龍宮城鐘の事」に最も近いと考えられる。以下これを原據として「秀郷」と比較してみたい。

まず「秀郷」にも「千束邑」同様末尾に收場詩が置かれている。

後人有詩、單道其射術之妙、詩云、

單身獨自入龍宮 毒箭發時斃蜈蚣

從是殿名傳海內 村童馬牛稱英風

(後の人の詩に、その弓の腕の素晴らしさを言った詩があります。

單身獨自龍宮に入り 毒箭發せし時蜈蚣を斃す

是れ従り殿名は海内に傳はり 村童馬牛英風を稱ふ)

弓の腕を稱えるこの詩も、物語に合わせて作られたものであろう。

また本文中に讀者への語りかけも見えるが、これは『警世通言』卷

一「俞伯牙摔琴謝知音」に見える表現を参考にしたものだと推測される。

「秀郷」..

這是有箇緣故、在下如今說出這緣故來、看官要聽的聽之、若要不要聽的請尊便、...

(これにはわけがありまして、それがしはこのわけを説くのです。お客様、聞く方はお聞きになり、お聞きにならない方は、勝手になさいませ。

...)

『警世通言』卷一「俞伯牙摔琴謝知音」..

今日聽在下說一樁俞伯牙的故事、列位看官們、要聽者、洗耳而聽、不要聽者、各隨尊便、...

(今日はそれがしが俞伯牙の故事をお話します。お客様方、お聞きになる方は耳を洗って聞き、お聞きにならない方は、勝手になさいませ。...)

『太平記』と比較すると、一齋が獨自に加えたと推測される描寫が

創作白話小説の方法

見出だせる。次に掲げるのは龍王が變身した大蛇の描寫であるが、傍線部は『太平記』には見えない部分である。

『太平記』卷十五「龍宮城鐘の事」..

長二十丈ばかりなる大蛇、橋の上に横たはり臥したり。兩の眼は耀いて、天に二つの日を掛けたるが如く、雙べる角は高く峙ちて、冬枯の森の梢に異ならず。鐵の牙上下に生ひちがふて、紅の舌は炎を吐くかと怪しまる。...

「秀郷」..

果有一大蛇、當着橋上、藤太定睛着時、只見兩隻眼如並懸日月、一雙角似樹起珊瑚、鱗甲內放出白光來、照得橋上橋下如同白日。

...

(果たして一頭の大きな蛇が、橋の上におりました。藤太が見ますと、兩の眼は日月を並べたようで、一對の角は珊瑚のよう、鱗の内からは光が放たれ、橋の上下を白日のように照らしております。...)

傍線部の鱗の内から光が出るという描寫は明らかに次の白娘子の描寫を踏まえている。

『警世通言』卷二十八「白娘子永鎮雷峰塔」..

見一條吊桶來大的蟒蛇、睡在床上、伸頭在天窻內乘涼、鱗甲內放出白光、來照得房內如同白日。...

次に本篇の中心的場面であり、收場詩にも關わる、秀郷が大百足を射倒す場面を擧げる。一本書と二本書の矢を當てられず、鏃に唾をつ

けた三本目で大百足を倒すという展開だが、「三本矢を射る」という趣向は『水滸傳』第十三回、第三十三回にも見え、譯す際に参考にされたと思われる。以下に『水滸傳』第十三回の楊志と周謹の場面と併せ、『太平記』、「秀郷」の該當場面を掲げる。

『太平記』卷十五「龍宮城鐘の事」

件の五人張に十五束三伏の矢を打ち番ひて引きしほり、忘るるばかり堅めて、眉間の眞只中をぞ射たりける。その手答鐵を射る様に聞えて、箭を返してぞ立たざりける。秀郷一の矢を射損じて安からず思ひければ、二の矢を番ひて一分も違へず、わざと前の矢所をぞ射たりける。この矢も先の如く跳り返りて、少しも身には立たざりけり。秀郷二つの矢をも皆射損じて、憑むところは矢一筋なり。何がはせんと思ひけるが、きつと案じ出だしたる事あつて、この度射んとしける矢さきに、玉沫を吐き懸けて、また同じ矢所をぞ射たりける。この矢に毒を塗りたる故にやよりけん、また同じ矢坪を三度まで射たる故にやよりけん、この矢眉間の只中を通りて、喉の中まで羽ぶくら責めてぞ立つたりける。：

『秀郷』

藤太搭上箭、拽満弓、颯着他頭腦一箭射去、只似射着鐵柱般箭折鐵碎、藤太着急射第二箭、也只如初、原來藤太常要賣弄自家的射術、行陣之間、也只執三箭、奈二箭已射不中、肚裡煩悶、常言、人急智生、忽然計上心來、吐些唾沫塗於鏃、又搭上箭、拽得弓、如満月、颯得親切、叫一聲中、再射將去、一箭落處、射貫着蜈蚣頭腦、：

（藤太は矢をつがえ、引き絞ると、かの頭を狙つて放ちましたが、鐵の柱

を射たかのように矢は折れ鏃は碎けてしまいました。藤太は慌てて二の矢を射ましたが、最初と同じようになつただけでした。實は藤太は自分の弓矢の腕をひからかして、戰の際は三本しか矢を持たないのです。如何せん二本の矢を外し、心中穏やかではありませんが、ことわざに、「人は焦ると知恵が出る」と申します。突然思ひついて、唾を鏃に塗り、また矢をつがえ、満月の如く弓を引き、よく狙うと、一聲のうちに再び射ました。矢は百足の頭を貫きます。…)

『水滸傳』第十三回（楊志と周謹が腕比べをする場面）

左手拿着弓、右手搭上箭、拽得滿滿地、望楊志後心、颯地一箭、……周謹見一箭射不着、却早慌了、再去壺中急取第二枝箭來、搭上弓弦、颯的楊志較親望後心再射一箭、……周謹見第二枝箭又射不着、心裏越慌、……周謹再取第三枝箭、搭在弓弦上、扣得滿滿地、儘平生氣力、眼睜睜地看着楊志後心窩上只一箭射將來、……左手如托太山、右手如抱嬰孩、弓開如満月、箭去似流星、說時遲那時快、一箭正中周謹左肩、：

『水滸傳』第十三回では周謹が三度矢を射るも全て外し、續いて楊志が一度で周謹の肩に矢を命中させる。二人は馬に乗つて矢を射ており、「秀郷」の場面と一致しない部分もあるが、秀郷が一の矢を外して慌てて二の矢を射たり、最後に當たる矢を「満月の如く」引くという部分が楊志の場面と共通している。また『水滸傳』第三十三回、花榮が屋敷に攻め入ろうとした兵士たちに弓の腕を見せつけ迫り返す場面とも、「搭上箭、拽満弓」等の語句が共通する。この場面は原據にない描寫を大きく増やしたとは言えないが、類似の場面の文章が参考にされたと推定される。

以上のように、「千束邑」「秀郷」にはいずれも收場詩・讀者に對する呼びかけが見え、白話小説の構成や特徴が強く意識されていることが窺われる。また白話小説の類似の場面から表現や展開の一部を借り、原據に織り交ぜながら書いていることも見受けられた。類似の場面を手本とすることで、譯しやすかつたのではないだろうか。千束村の民話と依藤太の傳説には、一齋がよく知る白話小説を連想させる要素があつたと考えられる。

一齋が白話小説の場面や表現によく通じていた背景には、單に讀むだけではなく、「寫して譯す」という鑑賞方法があつたことが考えられる。『小説粹言』序で一齋は次のように述べている。¹⁸⁾

餘誦習暇日、耽小説家書、賞以獨感、隨抄隨譯、裝爲十回、舊藏帳中、以其汰淫嫖猥褻、題曰粹言、：

(私は誦習の暇な時に小説家の書にふけて、鑑賞してひとり感じ入り、書き寫しては譯した。裝丁して十回としたが、帳中に長くしまつておいたものの中から、猥褻なもののはのぞいたので、『粹言』と題した。：)

白話小説を讀んで譯すだけでなく、本文を寫す、或いは抜き書きすることによつてその表現を學び取り、日本の傳説・風聞を白話文に譯す際に活かしたのではないか。彼の白話小説の鑑賞方法の延長にこの創作があつたと考えられる。

四、「記淨藏事」

「都下 呆山人撰」と記載のある「記淨藏事」(以下「淨藏」)は、平安時代の僧侶・淨藏貴所の傳説の白話譯である。梗概は次の通り。

創作白話小説の方法

ある年の十月、出雲大社を訪れた淨藏は、そこで神々が自身の伴侶を決めるのを耳にした。その後祈禱のため某殿に呼ばれた際、自分が飲み残した茶を一人の娘が飲んでゐるのを目にする。その娘が伴侶だと悟つた淨藏は、娘を殺して逃げ出し、修行に打ちこむ。その後身に着けた法力が世に廣まり、天皇から宮女を下賜されたが、それは殺したと思つてゐた娘であつた。淨藏は彼女と子をもうけたが、その後も力を失わず、數々の奇跡を起こした。

この話は『今昔物語集』『三國傳記』等の文獻に類話が見え、中村氏は『三國傳記』を原據に擧げているが、増穂殘口の『艷道通鑑』(正徳五/一七一五年刊)卷第十五「釋の淨藏の段」²⁰⁾が最も近似していると考えられる。出雲大社で神々が伴侶を定めるのを聞き、淨藏の残した茶を飲む娘を見てその伴侶だと氣がつく展開は『三國傳記』にはなく、『艷道通鑑』『釋の淨藏の段』のみに存する。これを原據と見たい。

「淨藏」には讀者への呼びかけの表現は見えないが、收場詩は先の二篇同様獨自のものが置かれている。また淨藏が娘を殺した後に、次のような詩が挿入されている。

忙出禁門、一道烟奔去了、正是、

黿魚脱却金鉤去、擺尾搖頭更不回

(急いで禁門を出ると、一目散に逃げました。これぞまさしく、大黿が釣り針から逃れば、尾を振り頭を振つて一目散)

これは白話小説に度々見える詩を用いたものと見られる。

『醒世恆言』卷三十三「十五貫戲言成巧禍」…

過了一宵、小娘子作別去了、不題、正是、

鰲魚脫却金鉤去 擺尾搖頭再不同

『警世通言』卷六「俞仲舉題詩遇上皇」…

當下二人同下端仙亭、出後園而走、却是、

鰲魚脫却金鉤去 擺尾搖頭更不同

この他『水滸傳』第六十二回や、『初刻拍案驚奇』卷二十にも見えるが、『醒世恆言』「十五貫戲言成巧禍」は岡白駒施訓『小説精言』卷一に採られた篇で、特に一齋が目にした可能性が高いと考えられる。詩以外に白話小説の一場面に關わる部分や、大きな追加・變更は見えないが、「不在話下（それはさておき）」「話休絮繁（くだい話はやめて）」といった白話小説特有の表現が見える。

また次に掲げるのは、淨藏が伴侶と定められた娘に氣が付き、殺そうとする場面である。

『艷道通鑑』卷一第十五「釋の淨藏の段」…

淨藏すハヤ出雲の御示現ハ。是を告させ給ふにこそと。むねつきて。懷中より細刀を取出し。件くだんの小女を取て臥ふせさし殺ころして。内裏うちをにげ出て二十年來。…

『淨藏』…

肚裏想道、大社衆神所告、是了是了、除非那幼女死了、方絕其患、心下定了計索、藏着匕首於懷裡、窺没人的時節、把這幼女刺了胸下一刀、忙出禁門、一道烟奔去了。…

（心のうちで思いますには、「大社の神々が言っていたのは、こいつに違

いない。この娘を殺す以外に、後患を絶つ方法はないぞ。計畫を練りますと、懷に匕首を隠し、人がいない時間を見計らつて、この娘の胸の下をぐざりと一突き。急いで禁門を出ると、一目散に逃げました。…）

『艷道通鑑』では、娘に氣づいて「むねつきて（はつとして）」刀を取り出すが、「淨藏」では「娘を殺す以外に、後患を絶つ方法はない」と覺悟を決める描寫が入る。これは次の『警世通言』卷五に見える表現に近似している。

『警世通言』卷五「呂大郎還金完骨肉」…

左思右想道、……到我看家的一個耗鬼、除非那秃駢死了、方絕其患、恨無計策、…

この呂大郎の話は一齋が『小説粹言』卷三に採つたものである。⁽²²⁾「淨藏」の執筆時期は未詳ながら、『小説精言』『小説粹言』収録篇に近似する表現が見える點には注目される。

五、「祈福漢吃騙話」

最後に「千束邑」と「秀郷」の間に置かれる「祈福漢吃騙話」（以下「祈福漢」）を検討する。梗概は次の通り。

遊びに金を使い盡くしてしまつた男が、京都岡崎村にある「富貴の祠」にお参りをして助けを乞おうとする。ある夜お参りに行くと一人の女が現れ、自分は祠に住む白狐で、先日獵師に攫われた娘狐を取り返してくれば、巨萬の富で恩を返すと言う。引き受けた男はその獵師を待ち伏せし、狐の子が入つた袋を買い取つた。袋を持つて急いで

祠へ行つたが、女は現れない。袋を開けると中から銀の毛の犬が出てきて、男はそこでようやく騙されたことを悟った。

この話を収録するものは未見だが、中村氏は類話として上田秋成の『諸道聽耳世間猿』巻五の一「昔は抹香烟たからぬ夜咄」(明和三／一七六六年刊)、『世間妾形氣』巻四の一「息子のは照降しれぬ狐の嫁入」(明和四／一七六七年刊)を挙げる。また森田雅也氏は荷田在滿による擬古物語『落合物語』(寫本、寛保二／一七四二年識)との類似について言及している。『落合物語』は武藏國落合村を舞臺とする物語であるが、氏はこれが「祈福漢」に影響を受けて書かれた可能性を指摘している。²³

もし森田氏の指摘通りであるならば、「祈福漢」は『落合物語』成立前、すなわち寛保二(一七四二)年以前の成立となり、「千束邑」同様『小説粹言』刊行前に書かれたものと確定できるが、この点については別途検討することとしたい。

中村氏、森田氏が挙げた類話は、確かに「祈福漢」と共通する要素を持つてはいるものの、展開がそれぞれ異なっており、原據と見なすのは難しい。²⁴當時知られた噂話をそれぞれの觀點から作品に仕立てたものと推測される。

「祈福漢」は先の「淨藏」同様讀者への呼びかけは見えないものの、收場詩と挿入詩によつて白話小説らしく仕立てられている。次に挿入詩を掲げる。

從是之後、日、參拜、沒有虛、正是、

急來抱佛脚 間時不燒香

(これより後、毎日參拜すること、眞劍そのものであります。これぞま

創作白話小説の方法

さしく、

困つた時は佛の足を抱き 何もない時は燒香もしない)

この挿入詩も獨自のものではなく、『水滸傳』『古今小説』等の白話小説に見えるものである。

『水滸傳』第十七回：

何清笑道、哥哥、正是急來抱佛脚、間時不燒香、我却要你銀子時、便是兄弟勒措你、：

『古今小説』卷十「滕大尹鬼斷家私」：

今日大塊銀子送來、正是、間時不燒香、急來抱佛脚、各各暗笑、落得受了買東西吃、：

「滕大尹鬼斷家私」は『今古奇觀』卷三にも同じ話があり、同様の表現が見える。白駒施訓の『小説奇言』卷三に採られたもので、一齋が參考にした可能性が考えられる。

また「淨藏」同様白話小説の一場面をそのまま參考にしたような箇所は見出せないが、小説中によく使われるフレーズを運用したと思われる箇所が見出せる。

『祈福漢』：

只是一个婦人、年紀二十歲上、頭戴月白娼婦帽、身穿白羅繡寶珠單衣、腰繞早縐子光帶、足穿一雙蟬釧時鞋、嬌、娜、妖、嬈、輕移蓮步、向前擲來、對那漢唱个萬福說道、：

(二人の女、年は二十歲ほどで、頭には白い娼婦帽をかぶり、身には白い

絹に刺繍をした單衣をまとい、腰には黒の帶を巻き、足には蟬の羽をあしらった流行りの靴を履いています。なよなよと、なまめかしく、輕やかに運歩を運んで、その男に向かって「萬福^{マンフク}」とあいさつして申しますには、…)

『初刻拍案驚奇』卷十八「丹客半黍九還 富翁千金一笑」…

只見嬈嬈娜娜、走出房來、道了萬福、……

『警世通言』卷十一「蘇知縣羅衫再合」…

只見紅衣女、妖妖嬈嬈的走近前來道、妾身乃是無過之女、……

『警世通言』卷二十六「唐解元一笑姻緣」…

只見兩個丫鬟、伏侍一位小娘子、輕移蓮步而出、珠珞重遮不露嬌面、……

「祈福漢」の傍線部では「嬈、娜、」妖、嬈、」輕移蓮步」を組み合わせ、女が現れる場面を表現している。右に掲げたように、複数の白話小説の類似の場面を参考にしたと考えられる。

「淨藏」と「祈福漢」は、讀者への語りかけは見えないものの、挿入詩や類似の表現を取り入れることによつて白話小説らしく仕立てられているといえる。先の二篇の原據は白話小説中の場面を連想させる要素があつたのだらうと推測したが、この二篇は原據と既存の白話小説中に挿入される詩との關連を考えたのかもしれない。白話語彙・決まつた言い回しの運用という點からみても、こちらの二篇の方が白話小説を読み込んだ上での創作のように見受けられる。

これら四篇を二人の異なる人物の作と見ることもできるが、筆者は白話小説の理解が進んだことによる創作方法の變化と考える。例えば、麻生磯次氏は都賀庭鐘の翻案作品における原據の利用について言及し

た際、『英草紙』卷二「黒川源太主山に入つて道を得たる話」(寛延二／一七四九年刊)は原據から「部分的に多少の變更」があると述べるに留めたのに對し、『垣根草』卷二「在原業平文海に託して冤を訴ふる事」(明和七／一七七〇年刊)は原據に對し「殆ど翻案の臭味を止めないくらいに脱化されてゐるのである」と述べた。これは庭鐘の白話小説の理解が深まり、自身の書きたい物語に合わせて利用できるようになつていったためと考えられる。同じように、この四篇の作者も白話小説の場面・描寫に依據する創作方法から、徐々に表現したい内容に合わせて白話語彙・フレーズを運用出来るようになっていったと推測される。

おわりに…日本文學史における創作白話文の位置

以上本稿では澤田一齋作と見られる四篇の創作白話小説について検討し、創作という行爲が白話小説の鑑賞の延長にあつたのではないかと推測した。また白話小説理解の深化によつて創作方法が變化した可能性を指摘した。

『白話文集』と同じく、「呆山人」が關わる創作白話小説『日本左衛門傳』『演義俠妓傳』も一齋の作品であると指摘されるが、これらは二回構成の中篇小説であり、詩を挟んで前後篇のように仕立てられた「淨藏」「祈福漢」が更に發展した形のように見受けられる。また初期讀本作品との共通點についても研究が行われている。最後にこの二作と『白話文集』との關連について述べ、結びとしたい。

『演義俠妓傳』について、袁葉氏は主人公の遊女・かしくが客と一夜を共にした場面に置かれる七言詩が、白話小説によく見られるものであることを指摘している。またかしくが奉行所へ連れられ罪を問わ

れる場面は、一齋の『小説粹言』巻五（『今古奇觀』巻二十九「懷私怨恨僕告主翁」）に見える拷問の場面とほとんど同様であることを明らかにしている。²⁹更に川上陽介氏は、『演義俠妓傳』冒頭の入話が『十二樓』のものを下敷きにしてしていると指摘した。³⁰

類似場面や詩の借用は、今回取り上げた作品と共通する手法である。中篇の『演義俠妓傳』執筆にはより高度な白話作文の技術が必要であったと推測されるが、その技術の背景には「千束邑」に見られたような類似場面の模倣に始まる創作活動があったといえるのではないだろうか。

『日本左衛門傳』については田中則雄氏の研究がある。田中氏は、主人公・日本左衛門の描寫に「惡業をなす者に對したとき、そこに何らかのやむを得ない所以や、道義的な意味合いを見出そうとする方向へは思考せず、惡は單に惡とした上で、却つてそこに道義の束縛から解放された精神の自由を見て取ろうとするような意識」が見えると述べ、その意識が初期讀本作家・伊丹椿園の作品にも見られることを指摘した。また「當時上方の人々は中國白話小説を愛讀する中で、そこに從來の日本の小説にはない、『惡』の活躍の描寫が存することに氣づいていた」と述べる。³¹

一齋による「惡」の活躍の描寫や、『白話文集』にそのような描寫が見えるかという問題については今後更に検討していく必要がある。ただ、白話小説獨特の人物描寫に氣づき、『日本左衛門傳』に取り入れることの出來た要因の一つには、やはり一齋が白話小説の模倣から創作を始めたことがあるのではないだろうか。先に見た「千束邑」では、民話の登場人物の行動が『水滸傳』林冲の行動に重ねられていた。日本の故事を白話小説に重ねるといふ文藝上の遊戲を楽しん

だ一面もあるのだろうが、同様の方法で創作を繰り返す中で、白話小説らしい人物描寫を習得していったと推測される。創作白話小説は白話小説を鑑賞・理解する方法であり、白話小説と日本文學の媒介ともなったのではないだろうか。一齋自身は讀本を書かなかつたが、讀本作家達に彼の創作が影響した可能性も検討する必要がある。『白話文集』の他篇や、他の作品も併せて検討し、創作白話小説の意義や近世期の白話小説理解についてより深く考察していきたい。

※本稿で使用した資料は次の通り。引用に際し、和刻本に付されている訓點・送り假名等は省略した。また讀點は原本に従った。

・『白話文集』

『中村幸彦著述集 第七卷』（中央公論社一九八四）所收の影印

・『水滸傳』第十回まで

『李卓吾先生批點忠義水滸傳』（享保十三／一七二八年、林九兵衛刊、九州大學附屬圖書館石崎文庫藏本〔所在記號：石崎文庫／923-リ-21-17〕、石崎文庫／923-リ-21-610）

・『水滸傳』第十一回～二十回

『李卓吾先生批點忠義水滸傳』（寶曆九／一七五九年、林九兵衛・林權兵衛刊、京都府立京都學・歴彩館藏本〔請求記號：和844-13、和844-14〕）

・『水滸傳』第二十回以降

『李卓吾先生批評忠義水滸傳』（容與堂刊、北京圖書館藏、上海古籍出版社『古本小說集成』所收）

・『古今小説』

天許齋刊本（國立公文書館内閣文庫藏、上海古籍出版社『古本小說集成』

所收)

・『警世通言』

金陵兼善堂刊本 (上海古籍出版社『古本小說集成』所收)

・『醒世恆言』

東京大學東洋文化研究所雙紅堂文庫藏本 (索書號: 雙紅堂小説 32)

・『初刻拍案驚奇』

尚友堂刊本 (日光山輪王寺慈眼堂法庫藏、上海古籍出版社『古本小說集成』所收)

・『今古奇觀』

上海圖書館藏本 (上海古籍出版社『古本小說集成』所收)

注

(1) 拙稿「唐話學と白話小説: 『教材』から『讀み物』へ」(『和漢比較文學』第六五集/和漢比較文學會二〇二〇)、『澤田一齋の『水滸傳』講義をめぐって」(『近世における唐話學の展開』第二部第二章/汲古書院二〇二四)を参照されたい。

(2) 注(1)前掲拙稿「澤田一齋の『水滸傳』講義をめぐって」にて検討している。

(3) 宗政五十緒「松峽 松室熙載年譜」一六二—一六三頁(『日本近世文苑の研究』未來社一九七七)。

(4) 田中則雄「水滸傳と白話小説家たち」一五二頁(『讀本論考』第二部第二章/汲古書院二〇一九)。

(5) 『日本左衛門傳』の寫本は現在五本確認されているが、その一つには「奚疑齋」と讀める印があり(國會圖書館藏本)、一齋の關與が窺われる(田中則雄「白話小説『日本左衛門傳』について: 論考と翻刻」/『島

大國文』第二七卷/島大國文會一九九九)。

(6) 『演義俠妓傳』は刊本だが公に刊行された形跡はなく、冒頭に一齋の印「東山高臥」が見える。關西大學總合圖書館長澤文庫、愛媛大學鈴鹿文庫、東京大學東洋文化研究所倉石文庫に現存が確認される(袁葉「俠妓かくし——近世日本の白話短篇小説『演義俠妓傳』をめぐって——」京都近世小説研究會平成二十九年四月例會發表資料)。

(7) 『中村幸彦著述集』第七卷第二章七六—七九頁(中央公論社一九八四)。

(8) 西田維則については『國書人名辭典』(岩波書店一九九三)、『近世白話小説翻譯集』第一卷(汲古書院一九八四)中村幸彦氏の解題に據る。

(9) 一齋が伏見に住んでいたことから、中村氏は二篇目の「茶式」も一齋作の可能性を指摘されたが、今回は小説風に仕立てられたものに注目したい。また、中村氏は「茶式」について「これのみは普通の漢文」と述べられたが、白話語彙の使用が見える。別途検討の機會を得たい。

(10) 『三和町史 上巻』八二六—八二七頁(三和町史編さん委員會編一九九五)に「口頭傳承」の一つとして類話が掲載されている。

(11) 寫本一冊、國會圖書館藏(請求記號: 詩文一〇二〇)。千束村の記事の他、漢詩や書簡、陶山南濤の『忠義水滸傳解』に寄せた序文等が記される。

(12) 金丸邦三「宋代小説話本の形式について」(『東京外國語大學論集』一五號/東京外國語大學一九六七)等。

(13) 『古今小説』卷二十八に「天有不測風雲、人有旦夕禍福」、「水滸傳」第二十六回にも「天有不測風雲、人有暫時禍福」とよく似た常言が見え、これを採り入れたものと見られる。

(14) 新井貴子「依藤太傳說と蛇體信仰: 百足退治譚をめぐって」(『國文目白』第二四號/日本女子大學國語國文學會一九八五)。

(15) 「時」は原本では「眨」と書いてあるように見える。『白話文集』の筆

記者は、時折「寺」を「之」や「乏」に近い形で書く癖があり、明らかに「詩」であるべき箇所「後人有詩」も「訖」のように書いている。そのため、この「眨」も「時」の意で書いた可能性が高いと考え、「發時」と解した。或いは「眨」の字にも見えるが、「發眨」「眨斃」の語は白話小説やその他漢籍の中に用例が見えず、意味が通りにくい。

- (16) 同じ話は「三言二拍」の選集である『今古奇觀』巻十九にも採られており、同様の呼びかけが見える。

- (17) 『新編日本古典文学全集 太平記②』（小學館一九九六）に據る。

- (18) 『小説三言』（ゆまに書房一九七六）所収の影印による。譯は筆者が付した。

- (19) 池上海一校注『三國傳記』補注三六八頁（三彌井書店一九八七）に據る。

- (20) 國立國會圖書館藏本（請求記號・京一56）に據る。また翻刻は金櫻堂刊本（一八九二）を一部参照した。

- (21) 白駒が底本にしたと思われる二十四卷本『醒世恆言』では卷三に收録される。『小説精言』の底本については拙稿「『小説精言』『小説奇言』の底本について」（注（2）前掲書第三部第一章）を参照されたい。

- (22) 呂大郎の話は『今古奇觀』卷三十一にも收録されており、尾形仇氏（解説）／岡白駒・澤田一齋施訓小説三言」所収／ゆまに書房一九七六、大塚秀高氏・王佳氏（『小説粹言』の依據した白話短篇小説集——不置堂本『今古奇觀』と『小説選言』／『中國古典小説研究』第一八號／中國古典小説研究會二〇一四）は、『小説粹言』が直接據つたのは『今古奇觀』であると指摘する。本文に引用した箇所には大きな異同はない。
- (23) 注（7）前掲書七七一七八頁。氏は『世間妄形氣』卷一の四」とするが、誤りか。

- (24) 森田雅也『落合物語』と『白話文集』（『江戸文学』第二三號／ペリ

かん社二〇二一）。

- (25) 三作品とも狐と騙しに關する物語であるが、このうち最も「祈福漢」に近いのは、「狐のふりをした人間が人間を欺き、金を騙し取る」という筋を持つ『落合物語』であろう。ただし、「祈福漢」では騙されるのが放蕩な男であるのに對し、『落合物語』では病にかかった娘の回復を祈る父親となっている。娘は結局死んでしまい、「世にかたましきはかりごととは多かれど、かゝる例しは未だ聞かず」「まことにめづらしく、且おそるべきはかりごとならずや」と結ばれる。男が京の笑い者となつて終わる「祈福漢」とは趣が異なると言える（『落合物語』は『荷田全集』第七卷六一九—六二三頁（吉川弘文館一九三二）に據る）。

- (26) 夜鷹などの街娼が頭に被る手ぬぐいを指すか。

- (27) 『今古奇觀』卷三十三に「唐解元玩世出奇」の題で收録されており、引用部分に大きな異同は見えない。白駒の『小説奇言』卷一は『今古奇觀』に基づき、この篇を收録する。

- (28) 麻生磯次『江戸文学と支那文学』第二章二（二）「趣向の脱化」（三省堂一九四六）。

- (29) 袁葉「妖婦かしく——俗語小説としての『演義俠妓傳』——」（京都近世小説研究會平成三十年二月例會發表資料）による。

- (30) 川上陽介「小説字彙」「援引書目」に見える中國白話文学作品について——『覺世名言』『春燈閣』『燈月緣』ほか（『江戸文学』第三八號／ペリかん社二〇〇八）。

- (31) 田中則雄「白話小説『日本左衛門傳』について——論考と翻刻——」（『島大國文』第二七卷／島大國文會一九九九）。また注（4）前掲論考では『演義俠妓傳』においても同様の意識が見えると指摘されている。